

特攻も青春だつたか
—十八年の生涯—



京焼 文齋窯 五代 小川 文齋

特攻も青春だつたか

—十八年の生涯—

京焼 文齋窯 五代 小川 文齋

京都薬品工業株式会社 小川文齋

本書は、平成二十四年七月二日、京都薬品工業株式会社ホールで
行われた折の講演記録を、講師小川文齋先生に加筆補訂いただい
た講演録であります。

特攻も青春だつたか—十八年の生涯—

京焼文齋窯五代 小川 文齋



一、私の小・中学生時代

唯今、ご紹介頂きました小川文齋でございます。私は昭和元年に京都市の四代続いた陶器屋の次男として生まれました。

私が小学四年生の時に兄貴はその五代目を継ぐべく、京都市立美術工芸学校の日本画に入学を致しました。しかし、それから世の中は段々と暗くなつていきます。私の小学校五年生の時には日支事変が起り、時局は益々緊迫して参りました。しかし、兄貴はそれでも日本画を続けるために、昭和十六年四月に今の芸大、当時、絵画専門学校と申しましたが、その日本画に進学を致しました。ところが、とうとう、その年の十二月八日、真珠湾攻撃によつて大東亜戦争が勃発したのであります。ラジオも「北太平洋上において、米英軍と戦闘状態に入れり」と報じました。「うわあ、これからどうなるんだろう?」と誰もがそう思いました。

翌昭和十七年、私は京都二中の四年生でしたけれども、学校の勉強よりも勤労奉仕が多くなつてきました。そして、鉄砲をこう持つてですね、兵隊さんの真似をするような教練という時間が多くなつていきました。また、女学生たちも女子挺身隊と書いたハチマキをしめ、モンペを履いて工場に出かけていく、そういう時間が多くなりました。そして、鬼畜米英と教えられました。アメリカやイギリスの兵隊は鬼畜である。鬼やケダモノである。もし日本が負けて、奴らが日本に上陸してきたら、男は皆殺される。女も大変なことになる。だから中学生も海軍兵学校、陸軍士官学校、或いは海軍の予科練に志願してはど、ほのめかされました。大学も四年が二年半に短縮されました。

昭和十八年になりますと、その大学生たちは学業半ばにして、予備学生という名前で戦場に駆りだされる人が多くなつてきました。もちろん、二十歳になれば徴兵検査であります。当時、私の兄貴は十九歳でした。ある時、「同じ兵隊に行くのやつたら志願して飛行機に乗りたい。」そんなことを言い出しました。日本画を勉強していた兄は当然、家の後を継いでくれるものと思つておりました私は、「いや、国のために、家族のために、同じ行くなら私が行く。」「兄さんは後を継いで下さい。私に行かせてください。」そんなやりとりが続きました。ところが、ある日、トイッと兄貴が家からいなくなりました。皆、心配しました。十日程して、やつと帰つて来た兄は、長い杖を持っていました。「ああ、富士山に登つてきた。そして、山の上から日本

を見てきた。もう、これで思い残すことはない。願書も出してきた。後を頼むぞ。」そう言つて、昭和十八年の九月二十九日、絵画専門学校の繰り上げ卒業式を終えると、翌々十月一日、陸軍操縦見習士官として九州の太刀洗飛行場に入隊をしてしまいました。

一、予科練入隊とその訓練



小川 齊
ひとき
大刀洗入隊

私も学校では、まあ、あからさまに志願を勧められるようになつておりました。しかし、私は兄貴が行つてしまつたもんですから、二人も家を空けるわけにいかない。ところが学校で友達と色々喋つていると、段々、また血が騒いで参ります。当時、私は十六歳の天の邪鬼であります。行くなど言わると、余計行きたくなる。考えに考え、また、思案に思案を重ねて、とうとう予科練、詳しく言いますと、海軍甲種飛行予科練習生と言いますが、その願書を提出してしまいました。父母の反対を押し切つてであります。兄貴が入隊してから

二ヶ月後の昭和十八年十二月一日、当時、私は十六歳と十一ヵ月でした。私の出発する朝、親父はぐでんぐでんに酔っぱらつておりました。手塩にかけた、後を継いでくれるであろう一人の男の子が、二人とも死ぬであろう戦場に出かけていく、いてもたつてもいられない気持ち。しかし、御国のためにと、それを押し静めねばならない辛さ。今にして思えば、よく分かります。本当に私は親不孝の最たるものであります。

私の入隊しましたのは、海軍三重航空隊奈良分遣隊という、名前は立派でありますけれども、その実は、奈良の天理市（当時の丹波市町）、天理教の各都道府県の信者が泊まる宿舎の畠の上で、海もなければ飛行機もない。がつかり致しました。しかし、訓練だけは人を人とも思わぬ、聞きしに勝る物凄いものでした。支給された服がだぶだぶ、「替えて下さい。」と言いますと「何を言うか、体の方を服に合わせろ。」そして不服な顔を致しますと、海軍軍人精神注入棒と書かれたバットが出て参ります。それでお尻を二十回も叩かれます。その痛さは、頭にすんずん響きます。その上、「支給された物は服と言わず靴下に至るまで、恐れ多くも天皇陛下から頂いた物だ。粗末にしたり、失くしたりするな。大切にしろ。」ところが、どういう訳か一つ二つと失くなる。失くなるとバットであります。そこで、お互に盗みあいが始まる。大変であります。

朝起きるのは六時であります。起床ラッパが、けたたましく鳴ります。鳴りますと、五分間

の間に服を着て、マットと毛布を角を揃えて積み上げます。そして、歯を磨き、顔を洗い、練兵場に整列しなければなりません。そして海軍体操、駆足をして、宿舎に帰つてくると、また整列であります。マットと毛布の角がスーツと揃つた立方体になつていない班はバットであります。しかし、班長さんも毎度毎度バットを振るのはしんどい。それで我々を二列横隊に並ばせます。そして、「前列まわれ右。」そして前の者を殴らせる。次は、殴られた者が殴り返す。それを班長さんが、じ一つと見ていて、力を入れていない者には、「こうするんだー。」と言つて力一杯殴つてみせる。食事は、食事当番が盛り付けします。ご飯はお鉢にすれすれ一杯、おかげは、一汁一菜。一汁は、みそ汁に葉っぱと豆腐が一切れ。一菜の方は、漬物二切れであります。十六歳、十七歳のお腹はペコペコ。ご飯を食べた後、食後の話題であります。「あー、腹減つた。何か食べたい。」「だいたい、ご飯とみそ汁は別々に食べたほうが良いのか、ぶつかけて食べたほうが良いのか、どっちが美味くて、どっちが腹がふくれるか。」そんな他愛もない話を真剣に話し合いました。だから、郊外で駆足の時など、班長がいないと畑の大根を引き抜き、順番に一口ずつかじりながら走りました。駆足から帰つて参りますと、今度は号令練習であります。「氣をつけ、前へ進めー。」と一時間、怒鳴りつけるわけでありますが、もう最後の方には声が出ない。でも、声の小さい者は、今度は腕立て三十分であります。

また、一二度ございました面会、各故郷から家族の者がご馳走を持つて参ります。

それを腹いっぱい食べて、ふうふう言いながら帰つて参りますと、また整列、そして駆足であります。お腹一杯にして駆足をすると、皆吐き出してしまいます。それもこれも皆、一日も早く立派な海軍軍人となるための基礎訓練であります。そして、七ヶ月して卒業になるわけでありますけれども、それまでの間、色々学力とか体力の検定試験がございましたし、最後に、飛行機に乗つた時の操縦に向いているか、或いは偵察に向いているかの適正検査がございました。

三、特攻隊編入

そして、何もかも終わつたところで、分隊長が我々を講堂に集めました。そして、「日本は勝たねばならない。その為に素晴らしい特攻の兵器が出来た。これに乗つて戦いたい者は一步前に出ろ。」一步前に出ることは、その特攻兵器に乗つて早く死ぬことであります。しかし、一步前に出なかつたら、また、あの恐ろしいバットが待つています。死ぬほど怖いバットです。ほとんどの者が一步前に出ました。

そして一ヵ月後、その発表がございました。我々の分隊二百五十人中、選ばれたのが十名であります。その十名の中に、どういうわけか私も入つておりました。びっくり致しました。特攻隊に編入されたわけであります。忘れもしません、昭和十九年九月一日、朝食後でした。

泣きながらグーツと握手をしてくれる同僚たちに別れを告げて、天理市から汽車に乗りました。何人一緒になのか、或いは、どこに行くのか全然告げられません。汽車に乗りましたが、鎧戸は下りたままであります。どこをどう走っているのか、どっちに向いて走っているのか全然分からぬ。大きな駅も小さな駅も素通りであります。そういうたつのものが、「お前たちの任務は重いんだぞ。」と言つているような気が致しました。

四、大竹潜水学校

着きました所が呉の軍港でした。でも、その近くの大竹潜水学校に連れていかれました。そして、来る日も来る日も、今度は潜水艦乗りとしての基礎訓練であります。しかし、奈良には海がございませんでした。だから、しなかつた訓練も沢山あります。例えば、泳ぐこと、高い所から海に飛び込むこと、或いは、カッターと言いまして、普通のボートよりずっと大きなボートを漕ぐことです。そういうことは、しておりません。でも、「お前たちは何してたんだ。」と言つて、またバットで殴られるわけであります。悪いことをしていないので、地獄の責め苦にあつているような、そんな雰囲気でした。しかし、それに耐えることができたのは、我々は沢山の中から特攻隊に選ばれたんだというプライドだけが唯一の頼りでした。しかし、予科練

時代と違つて、食べるものは量、質共に素晴らしく良くなりました。そして、大きな本当の潜水艦にも乗せられました。水兵たちは、こまねずみのようによく動きますが、それと同じようなことをやらされました。

五、海軍通信学校

十月の末に、我々は四つの班に分けられ、それぞれの学校に行くことになったのです。水雷学校、通信学校、電気学校、機関学校であります。私は通信学校に行かされました。横須賀の三浦半島先端にありました海軍の通信学校であります。そこで、モールス信号、ツートツーツートツーというあれですね。その送受信の訓練をやらされました。みんな初めてのことなので大変です。ツートツートツーは「ア」です。トツーは「イ」です。ツートトトとは「ハ」。それらを全部覚え、一分間に七十送信、また受信するという訓練であります。一つ間違えると、一つ、またバットであります。「あ、一つ間違えたな。」と思うとタタタつと三つ四つ過ぎてしまします。だから、一つ間違えたら、それを捨てて次からとのように指導されました。大変でしたけれども、二ヵ月後には、ほとんどの者が一分間に八十送受信することができるようになりました。

六、大浦第一特別基地

昭和十九年十二月三十日、いみじくも私の十八歳の誕生日であります。呉に帰つて参りました。そして、大浦第一特別基地、通称P基地と言つておりましたが、呉の向かいにあります倉橋島にある海軍の特攻基地に入りました。そこで昭和十六年、真珠湾攻撃をした特殊潜航艇（A型）の改良されました、D型の乗員を命ぜられたのであります。予備学生出身の艇長一人、それに各専門の予科練出身の艇付が四人。五人一組で、初めての顔合わせの者ばかりでした。あの真珠湾攻撃も、オーストラリアのシドニーも、或いはマダガスカル島の奇襲も全てこの部隊であります。だいたい、海軍では潜水艦乗りというのは非常にエリート意識を持つてゐるわけでありますけれども、このP基地の者は、それに輪をかけたようなプライドを持つております。下士官がやつて来て、「てめえら、飛行機に乗つてりやいいものを、何しに海に潜りに来やがつたんや。ここは海軍の特攻基地やぞ。覚悟はええか。」ニヤツと笑いました。

七、特殊潜航艇の訓練



下士官の服を着て 18歳

ボタンとか、装置が一杯付いています。私はそこの操縦も任されました。腰かけて頭が天井につく。海に出ますと、丸い形ですから、左四十五度、右四十五度に揺れる、揺れる。外が見えないから余計ムカムカ力する。すぐに吐き出してしまう。でも、そんなことは一切お構いなし。潜つたり、上がつたりしながらの発射訓練であります。おまけに海の中は凄く寒い。しかし、トイレなし、垂れ流しであります。その上、七時間もおりますと今度は息が苦しくなる。肩で息をしなくてはならなくなる。そうすると、海上へ上つてハツチを開けて外へ出ます。空気の美味しいこと。そして外で待つております監視艇の五人と交代をするわけでありますけれども、

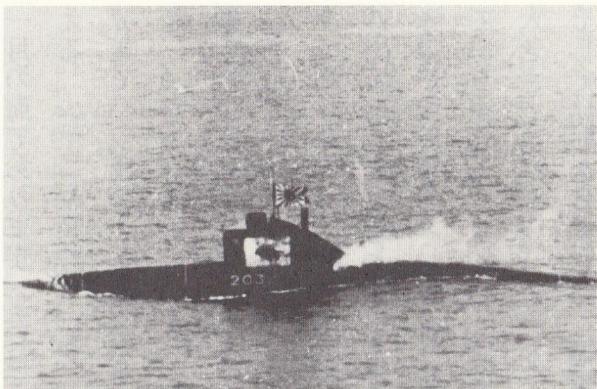
一月の半ば頃から特殊潜航艇の訓練が始まりたのであります。長い円筒を横にしたような格好で上にハツチが付いていて、そのハツチから中に入りますと、中は薄暗くて油臭い。前に魚雷が二本、その次に、一メートル程の大きなGS電池、それが十二基置いてある。そして、

次が操縦室であります。そこにはスイッチとかGS電池、それが十二基置いてある。そして、

監視艇は無防備であります。

私はその監視艇に乗った途端、二回もグラマン戦闘機の襲撃にあつたことがございました。グラマン戦闘機は、ウワアーッと、こう旋回しながら段々段々近づいて参ります。そして、最も近づいたときに機関銃をバラララーッと撃ち出します。我々は急いで海に飛び込みます。一月の海であります。そして、船の底にしがみつきながらチラツと見ますと、はつきり顔が見える。ニヤニヤ笑っている。腹が立つ。そして、向こうに行つたかと思うと、またバーッと出てきてバラララーと撃ち出す。また海に飛び込む。本当に戦場やなと思いました。そんな訓練を三ヵ月みっちり行いました。そうすると、体が覚えるというのか頭が覚えるというのか、艇の中で反射的に体が動くようになりました。

そして、四月一日に「特攻術賞」というのを戴きました。八重桜の付いた左腕に付けるマークであります。これは特別賞であります。その特別賞を付けて、呉の町に上陸を許されました。外出のこととを上陸と言いますが、音戸の瀬戸を通つて呉の港に入るや否や、B-29が六十機編隊でやつて参りました。当時、呉の港には、あの不沈と言われた戦艦大和が最後の雄姿を見せてくれました。大和の主砲は直径四十五センチであります。我々の特殊潜航艇の魚雷と同じ大きさであります。それが、前後左右だけじゃなくして、グルグルと三六〇度まわります。そして発射をしました。編隊の相当離れたところで破裂しましたが、それでも、その近くの



特殊潜航艇 蛟龍での訓練

B-29が五、六機、ダーツと墜落しました。「うわあ、すごい。」と思いました。その不沈の大和は四月五日に呉を出港致しました。そして、四月七日、沖縄に行く途中で、不沈のはずの戦艦が撃沈されたのであります。

それから五月に入りますと、我々の訓練は殆んど寝ない、実戦的訓練でした。航行艦襲撃訓練と言いまして、向こうから敵の戦艦がやってくるのをこちらから撃つわけであります。だいたい三十メートル潜り、ジグザグに近づいて行きます。そして、六十度の角度で三百メートルに近づいたところで急浮上して、ドーンと撃つ。すぐにまた潜って、反対の方から浮上して撃つわけであります。朝五時に弁当を持って出発を致します。そして、息が苦しくなるまで海中での訓練を二回、そして帰つて参りますのが夜の十二時であります。それから風呂に入り、ご飯を頂いて反省会、寝るのが二時であります。そして出発が五時、それが一週間続くわけであります。寝てるのか起きてるのか分からぬ。十八歳の体、ようもつもんだと思いました。

八、舞鶴特攻隊編入



一時帰宅 家族と
(前列中央が父、左端が母、後列右から 2人目が私)

そして六月に入り、舞鶴行きが告げられました。今まで特殊な船、例えば、我々の五人乗りの特殊潜航艇、また、一人乗りの海龍、また、一人乗りの人間魚雷回天という船。それらは全て呉の海軍工廠で作られておりましたけれども、空襲で損傷が激しく作ることができなくなり、舞鶴の海軍工廠でも作るようになつていていたのであります。で、我々の艇も舞鶴で作っているから、舞鶴に行つてそれに乗りなさいというわけであります。

舞鶴へ行く途中、我々艇付四人は京都の我が家に一泊を致しました。昭和二十年六月です。家には食べるものは何もありませんでした。我々は持っていた缶詰とか乾パンを出し合って、家族共々、楽しい食事を致しました。我家の五右衛門風呂も焚く物がありません。母親は壇の一部を壊して焚いてくれました。三十センチぐらいしかなかつたお湯でしたけれども、皆、気持ちよく入つてくれました。そして、朝までワイワイガヤガヤ、ごろ寝を致しました。



自宅 五月人形の前で

翌朝、四人そろって京都駅まで歩いて行く後ろ、百メートルのところを父と母が付いて参りました。どんなことを思っていたのでしょうか。たぶん、これが最後、今生の別れと思っていたと思われます。実は私も、そのように思つておりました。父五十歳、母四十八歳でした。

舞鶴に着きますと、大きな重い荷物を担ぎながら宿舎に歩いて行く途中、また、

あのグラマン戦闘機がやつて参りました。今度は路上であります。逃げる所がない。咄嗟に荷物を放り出して、道端のドブに一文字になつて寝ころびました。その横の垣根を機関銃がパラパラ一いつと十センチ間隔で通り過ぎました。「助かつた。」というよりも、「こんちくしよう、覚えてろよ。」と、そんな感じやつたのを覚えております。

九、蛟龍四〇七号

宿舎に入つて早速、海軍工廠に艇を見に行きました。我々の艇は、ほとんど出来あがつておりましたけれども、内装が少し残つておりました。名前は、蛟龍四〇七号こうりゅうでした。蛟龍といふのは龍の中でも最も強い龍、その子供を蛟龍というわけであります。その四〇七号が出来上がりますまで、我々は宿舎の近くの湾にありました火薬の工場によく行きました。そこは、我々の魚雷に詰める火薬を作つたり調合したりする所でしたけれども、女子挺身隊が沢山働いておりました。当時、我々は十八歳・十九歳であります。たぶん、女子挺身隊の人たちは、十六歳か十七歳だったと思ひます。すぐ仲良くなつて、よく話を致しました。しかし、当時、我々は知らない若い女の人と話した経験など一度もございません。その時、初めて、異性としての感情を持つたような、そんな気が致しました。

しかしです、六月の末頃、舞鶴は大空襲がございました。我々の宿舎の中庭にも海に落とすべき機雷がブワーッと大きな音で落ちて参りました。三メートル程の機雷が半分地中に突き刺さりました。破裂はしませんでした。急いで工廠に艇を見に行きました。その途中、あの火薬の工場がほとんど全滅するほど、被害におうておりました。そして、昨日まで仲良く喋つていた女子挺身隊も多くが犠牲になり、亡くなりました。煮えくり返るような憎さ、そして寂しさ

であります。しかし、「我々も、すぐ行くからね。」と、そんな気持ちでした。湾の海水は真黄で、どろどろしていました。

七月になつて蛟龍四〇七号が出来上がりました。しかし、考えれば、これは我々の棺桶であります。もし、やられて海に沈んだら出ることができない。未来永劫、五人そのまんま一緒であります。正に一心同体であります。その我々の艇四〇七号に乗つて、日本海で晴れ晴れと訓練を致しました。非常に苦しかつたあの訓練も今は何と楽しいことか。「敵さん、早く来いよ。」そんな気持ちでした。

十、特攻出撃命令

そして八月に入り、日本に原子爆弾が二発投下されました。日本の敗戦を見越して、ソ連が相互不可侵条約を一方的に破棄して、参戦して参りました。それに対しまして、我々、舞鶴突撃隊、第一特攻隊、我々のことではありますが、特攻・出撃命令が出ました。「四〇七号、八月

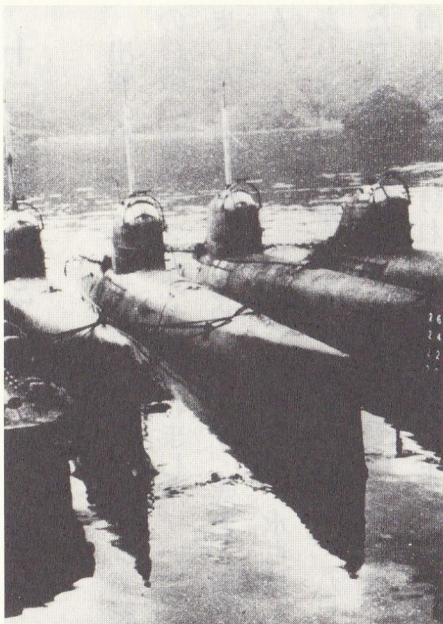


艇付4人 (右端が私)

十六日、対馬に進出すべし。」任務、「九州西岸に上陸を企てるアメリカ艦隊と日本海北東部のソ連艦隊の日本上陸を阻止し、撃破すべし。」「よーし。」という気持ちと、「日本に上陸を許してたまるか。」という決意と共に、天皇陛下から軍艦機を戴きました。そして、一人一人、自害用のピストルも頂戴を致しました。「やつと死ぬ順番が来たか。」そんな気持ち。少しも怖くなかった。しかし、日が近づくと、死んだおじいちゃんの夢を見るようになった。「そうだ、会えるんや。」

十一、終戦、そして出撃

出撃の前日、八月十五日、港にクレーンで艇を吊り上げ、魚雷を二発装填中、あの天皇陛下の終戦の詔勅がラジオから流れました。いつ間に力が抜けて、その場にへたり込んでしまいました。日本負けたんや。くそ。残念、無念であります。しかし、我々の艇は既に食料も積んだ。もちろん、魚雷も二発積んだ。水も積んだ。油も積んだ。準備万端、整っているわけであります。「出撃しよう。」艇長の一言で、八月十六日、終戦になりましたけれども我々は残つた女子挺身隊十数名の見送りを受け、出撃を致しました。そして、対馬に向かいました。しかし、海には船もなければ飛行機もおりません。我々は意氣消沈、日本海に潜りました。常は三十



出撃直前の蛟龍

メートル程ですが、その時は百メートル沈みました。ドンと底に着きました。百メートルの水圧。艇の接続部分からジユジユ、ジユジユと海水が少しづつ入って参ります。日本刀とピストルを前に置いての話し合いが始まりました。「日本負けたんや。ここで死のう。」「いやいや、今死んだら、それこそ大死にや。帰つて、もう一度、日本のために頑張ろうや。」今度は酸素が不足してきて、呼吸が困難になつて参ります。それまで、一言も喋らなかつた艇長が、やお立ち上がり、力なく唯一言、「おい、帰るぞ。」我々は舞鶴に帰つて参りました。

十二、復員と兄の戦死

八月の末に傷心の思いで、抜け殻のようになつて京都の我が家に帰つて参りました。私を見るなり、親父は私に抱きつきました。「よかつた、よかつた。よう帰つて来てくれた。よかつた、

よかつた。」そう言つて、ぽろぽろ涙を流しました。そして、私の顔をじつと見ながら、「でもなあ、でもなあ、兄ちゃんが、兄ちゃんが、沖縄で、沖縄で、敵の船に体当たりして、死んだんやつて。」そう言つて、また、ぽろぽろ涙を流しました。祖母も母も姉も、また、妹たちもやつてきました。そして、皆、一つの大きな輪になつて泣きました。私も、「あんなに優しく絵を描いていた兄貴が特攻隊の隊長やなんて嘘や、嘘や。」そう言つて泣き崩れました。それから二ヶ月して、兄は石ころ一つになつて帰つて参りました。その石ころを見て、また、皆泣きました。私もその兄貴である石ころを見て、『おめおめ生きている自分の惨めさ』をつくづくと感じました。ただただ恥ずかしかつた。寂しかつた。兄貴すまない。申し訳ない。そして何も出来ないでいる自分がむしょうに情けなかつた。その時はつきりと、これで私の十八年の生涯は終わつたと思いました。

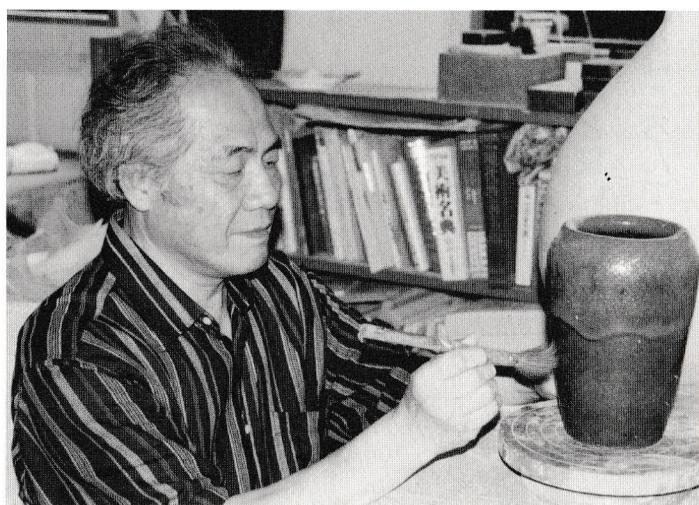
しかし、じつと見つめている石ころの兄貴が私に何か話しかけてくれているような気が致しました。『おい、待て、待てよ。お前には、あんなに沢山一緒に泣いてくれる優しい家族がいるやないか。

兄 小川 齊 大尉



皆のために、お前、何とかせなあかんがな。お前が死んだらどうなるんや、お前は今、生きて
いる。お前が頑張らんで誰がやるんや。出来る出来んではない、もつと強くなれ。あんなに
バツトで殴られたのに耐えたお前やないか。頑張れ、頑張れる、頑張らねば。』優しい兄貴が
優しく強く、何回も何回も話しかけてくれました。それから六十七年。私は八十五歳、兄貴は
八十八歳の米寿でございます。今も一緒に、時々叱られています。

どうもご清聴有難うございました。



工房にて

十三、いつも一緒に（平和への願い）

小川 文齋

子供の頃の思い出は

トンボとりに魚つり

虫かご担いで山から山へ

兄と私は一緒にいつも

走つてころんでも笑つて泣いた

いつも一緒に走つたように

二人はいつしか戦争へ

ころばぬようにと誓いしに

あゝ無念兄はころんでも大空の

はるか彼方の海に落つ

落ちた兄貴よ海中の

花となるより願わくば

トンボとなりて大海に遊べ

魚となりて大海に遊べ

いつか一緒にころんで笑おう



兄 小川 齊



沖縄糸満市
兄の名前入った戦没者慰靈碑の前で
妻と自作の盃でお酒を捧げる私

講師紹介

小川 文齋（おがわ ぶんさい） 昭和元年生れる。

京焼文齋窯五代目当主。京都芸術短期大学教授、学長等を務めながら作陶に励み、フランスバロリス国際陶芸展国際名誉大賞、日本新工芸展内閣总理大臣賞、文部科学大臣表彰社会教育功労賞、京都府文化賞功労賞、京都市教育功労賞、京都市芸術功労賞等多数受賞。又、中国西安大学等で日本近代陶芸の集中講義を行う等、内外で活躍。現在日展参与、京都工芸美術作家協会理事長。日本新工芸家連盟近畿会会長。

作品紹介



トンボを描いた作品 「仲よし」



魚を描いた作品 「輪舞」

